



Title	日清戦争がロシア世論に与えた影響：日本に対する新しいイメージの形成
Author(s)	コヴァルチューク, マリーナ
Citation	大阪大学言語文化学. 2003, 12, p. 125-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77953
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日清戦争がロシア世論に与えた影響 ー 日本に対する新しいイメージの形成 ー*

コヴァルチューク・マリーナ**

キーワード：ロシア世論、競争相手、日清戦争

Известно, что политика Японии, проводимая в 90-х гг. XIX в. в отношении Кореи, а также японо-китайская война 1894-1895 гг. оказали значительное влияние на развитие её отношений с рядом западных стран, в первую очередь с Россией и Великобританией.

В представленной работе на основе анализа статей и писем читателей, посвященных внешней политике Японии, которые были опубликованы на страницах петербургской газеты «Новое время» в период японо-китайской войны 1894-1895 гг., мы попытались ответить на вопрос, в какой степени активизация японской политики в Восточной Азии повлияла на изменение образа этого государства в российском общественном мнении, а также определить какие именно факторы оказали наиболее значительное влияние на этот процесс.

Проведённое исследование показало, что до 1894 г. российская пресса уделяла достаточно мало внимания внутренней и внешней политике японского государства. Однако, с началом военных действий на Корейском полуострове внимание к событиям, происходящим в непосредственной близости от восточных границ России, резко возросло. Доказательством этому может служить многократное увеличение количества публикаций, посвящённых Японии и японо-китайскому конфликту. Если в начале войны (лето 1894 г.) российское правительство, а в след за ним и российская общественность больше беспокоились о том, что азиатский конфликт может перерасти в европейский, если в него решит вмешаться одна из западных держав, то уже к зиме 1894-1895 гг. опасения стала вызывать сама окрепшая и почувствовавшая вкус побед Япония.

* Влияние японо-китайской войны 1894-1895 гг. на процессе изменения образа японского государства в российском общественном мнении (90-х гг. XIX в.) (КОВАЛЬЧУК Марина)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

Тем не менее, анализ российской прессы показал, что в 90-х гг. XIX в. отношение других европейских государств к японской политике оказало значительное влияние на процесс формирования негативного образа Японии в российском общественном сознании. Наиболее серьёзную роль здесь сыграла позиция давнего соперника России - Великобритании. Благоклонное отношение последней к условиям японо-китайского мира, идущего в разрез с интересами России, усилило антияпонские настроения и в определённой степени подтолкнуло Россию выступить в союзе с Германией и Францией против условий Симоносекского соглашения, касающихся Ляодунского полуострова.

1. はじめに

1890年代、日本の対朝鮮、対中国の政策は、日朝・日中関係のみならず、西洋諸国、特に東アジアにおいてもっとも強い経済的、政治的利害を有していたイギリスとロシアとの関係にも大きな影響を及ぼした。1895年に下関条約の締結に終わった日清戦争が、日露関係と日英関係に異なった影響を与えたことはよく知られている。日清講和条約に従って、日本は遼東半島の領有権を得たが、ロシア、フランス、ドイツによる三国干渉のため、やむを得ず遼東半島北部の領有権を「自発的に」手ばなす結果になった。この出来事は、日本人の中で対露感情を著しく悪化させた。岡崎久彦は『陸奥宗光とその時代』という著書において、「第二次戦争までの世代の日本人は、三国干渉と聞くと、もうそれだけでからだじゅうの血が怒りに燃えたものである¹⁾。」と述べている。

一方で日清戦争前後の東アジアにおける日本の政策を研究している多くの歴史家、例えばイギリスの I.ニシ²⁾、ロシアの Л.Н.クタコフ³⁾、日本の中塚明⁴⁾、アメリカの R.S.マク・コルドク⁵⁾らは、日本の東アジア政策がロシアに「競争相手」、「敵」という日本イメージを持たせたと指摘している。彼らはロシア政府が東アジアにおけるロシアの政治的、経済的、地政学的な利害を守りたいという願望から、三国干渉への参加を決定したとしている。日本が遼東半島北部を通して、ロシア国境に進出することを可能とした下関条約は、ロシアにとっては、国の中央から遠く離れたロシア極東に対する大きな脅威となるものであった。

しかし、日清戦争期にロシアが日本を「競争相手」と見なし始めた過程やそのイメー

¹⁾ 岡崎久彦『陸奥宗光とその時代』PHP 研究所、1999、406 頁。

²⁾ Nish I. *The Origins of the Russo-Japanese War*. New York, 1985.

³⁾ Кутаков Л.Н. Россия и Япония. Москва, 1988. С.220.

⁴⁾ 中塚明『日清戦争の研究』青木書店、1968、292-293 頁。

⁵⁾ McCordock R.S. *British Far East Policy*. New York, 1976. P.125

ジの特徴は、日本、ロシア、またイギリスの歴史研究においても詳細に研究されているとは言いがたい。つまり競争相手というイメージが下関条約の締結後に突如として発生したのか、それとも日清戦争の当初から形成が始まっていたのか、という問題は未だ明らかにされていない。

そのため、本稿では、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』というロシアの新聞に1894年から1895年にかけて掲載された日清戦争に関する記事の内容を分析し、競争相手という日本のイメージがどのように形成されたのか、その過程でいかなることが特に大きな役割を果たしたか、またロシア政府の見解がロシア世論にどの程度影響を与えていたかを考察する。

2. 日本に対する競争相手という意識の形成

2.1 『ノーヴォエ・ヴレーミャ』新聞について

『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙は、1871年から当時ロシアの首都であったペテルブルグで発行されており、ロシアの政治に関する新聞の中で最も発行部数が多い(約35000部)日刊紙であった。そして、Ф.А.ブロクタウズ等によって編纂された1897年の事典⁶⁾によると、1880～90年代に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙は、ロシアで最も広く普及した政治新聞の一つであったという。この新聞のきわだった特徴はロシア政治に関する鋭い見解にあった。1894～1895年に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の編集長をしていたA.C.スヴォリンの『回想』⁷⁾によると、日清戦争期にこの新聞はロシアの外務省と密接な関係があったため、戦争に関して、他の新聞より詳細な情報を得ることが出来たという。したがって、日本の政策に関する情報と共に、日本に対するロシア政治家の評価も、この新聞の社説にしばしば引用されていたのではないかと推察される。

しかし、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の紙面には、ロシア政権の見解を表明する社説の他に、読者の投書も記載されていた。それ故、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙の記事を分析することによって、ロシア政府だけでなく、ロシア国家政権に関係がない一般ロシア人の、日本に対する見解とその変化を窺い知ることができる。同時に、社説がロシア世論にどのような影響を与えたか、またさらに日本と、極東における日本政治に対して、ロシアの政治家と世論がどの程度一致し、また相違するかを検討することが出来ると思われる。

2.2 日清戦争前のロシアにおける日本に対する見解

⁶⁾ Брокгауз Ф.А., Ефрон И.А. Энциклопедический словарь. Т.21. С.-Петербург, 1897. С.278.

⁷⁾ Суворин А.С. Воспоминания. 1929.

『ノーヴォエ・ヴレーミャ』のほか、『サンクト・ペテルブルグ通報』というロシアの雑誌に掲載された日本に関する記事によると、日清戦争開戦前、多くのロシア人にとっては、日本は、ヨーロッパと異なる伝統や習慣を持ち、遠く離れた東アジアの国であった。例えば、1873年3月27日に『サンクト・ペテルブルグ通報』は、岩倉使節団がペテルブルグ近衛騎兵連隊の教会パレードに参観したことについて次のような言葉で伝えている。「調馬場前の広場に皇帝陛下がお出ましになっていた間ずっと、日本の代表たちは、華やかに居並ぶたくさんの侍従武官団全員と同じく帽章に手を当てた敬礼の姿勢で立っていた。その礼装に身をつつんだ若い使節団員たちは美しく、まったくヨーロッパ人のように見えた⁸⁾。」そして、『サンクト・ペテルブルグ通報』誌の伝えるところによれば、日本人がヨーロッパ人のように見えることは驚くべきことであった。

1870年代、一般のロシア人だけでなくロシアの政治家も、東アジアに正確で、効果的な政策を行うために必要な、日本の経済・政治における方針と計画についての情報を持っていなかったことは事実である。その頃、積極的な侵略政策を行っていたロシアは、小さくて、遠く離れた日本が、近い将来ロシア帝国の競争相手になる可能性について、あまり考えていなかったといえる。ロシア世論において、日本に対するこのような見解は1890年代まで存続していたようだ。

1890年代に、日露関係に強い影響を与えたロシアの財政相 C.Ю.ウィッテの回想によれば、日清戦争の時代におけるロシアの大部分の政治家に東アジアにおける事態についての知識が不足したため、中国は何であるか、中国、日本、朝鮮がどこに位置しているか答えることが出来なかったという⁹⁾。C.Ю.ウィッテによると、その頃ロシアの政府の中で、東アジアで起こっている情勢について知識を持っている政治家は、ウィッテの他だれもいなかったという。それ故、ロシアの東アジアにおける外交政策は、外務省でなく財政省が、管理下に置かれていた。財政省の管理下に置かれていたため、日本、中国、朝鮮に対するロシアの政治が主に経済的な利益に基づいて行われていたと考えられる。

これらの事情を考慮に入れれば、多数のロシア政権の決定をより簡潔に説明することが出来るだろう。例えば、ロシアの皇帝アレクサンドル三世と財政相ウィッテの意向により、1860年に開設されたウラジオストック港、及びシベリア鉄道の建設の主な目的は、東アジアにおける侵略政策を行うことより、ロシア帝国の東部の経済的發展に寄与することであった。ロシアの最も東方の港であるウラジオストック港が、冬の三ヶ月間氷結で使用できないため、1890年代の初めから帝国の政権は、中国の太平洋沿岸で不凍港を賃借する機会を伺うようになった。日清戦争の開戦は、ロシアの政治関係者に不安を与

⁸⁾ Санкт-Петербургские ведомости - 7.4.1873 (16.3.1873)、№ 85.

⁹⁾ Витте С.Ю. Воспоминания. Москва, 1960. С.44.

えた。1894年9月21日に行われたロシア政府の会議資料には、ロシアの政治家が、中国、または朝鮮における日本の積極的な政策が、その地域におけるロシアの利害に取り返しのつかない打撃を与えうるという恐れを抱き始めたと記されている¹⁰⁾。

1894年の夏、日清戦争の開戦当初、ロシアの新聞紙面において日本に関する記事の数が著しく増加し、紙面上の日本に対する見解も大きく変化した。開戦前にもペテルブルグ、モスクワの新聞では、日本の外交や国内政策についての記事が記載されていたが、その内容からは、日本の侵略政策が、東亜におけるロシアの経済的、政治的な利害を脅威にさらすという意識が感じられなかった。

1891年に大津市で起こったロシア皇太子暗殺未遂事件、いわゆる大津事件についての記事においても、日露関係について『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙は次のように記している。「ロシア人に対する憎悪が犯行の動機になったことはまったくあり得ない。そもそもそのような憎悪は日本に存在しないということひとつをとっても、それは明らかだ。ロシアは日本に対しかつて一度も害をなしたことがないし、[略] ロシア人は、他の外国人と比べて、日本人の不満感を呼び起こす度合の最も少ない民族であると言えようことができる¹¹⁾。」

そのため、1894年の夏、日清戦争の開戦は、ロシア世論において、日本に対する「競争相手」イメージの形成の出発点になったと言えよう。

2.3 日本に対する競争相手というイメージの形成の第一段階

『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙の分析を通して、日本に対する新しい見解の形成が三つの段階に分けられることが明らかになった。第一段階は1894年8月から10月の初めまでである。その時期にロシアの新聞紙面に掲載された記事は、日清開戦が、ロシア人にとって予期せぬものであったことを証明している。

戦争の初期には、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙面では、ロシア政権の見解を表明している社説しか載っていなかった。社説では、他のヨーロッパ諸国が、アジアの戦争に対してどのような態度を取るかを予測していた。記事の内容を分析すると、その頃ロシア政権が、日清戦争の結果よりむしろイギリスとフランスの日清戦争に対する態度に注目していたことが明らかである。9月15日に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の社説は、「戦争の結果に利害関係を持つヨーロッパ列強の中で、ロシア、イギリス、フランスが浮上してきたが、それはこれらの国がすべて貿易問題以外に植民地的な利益によって極東と

¹⁰⁾ Красный архив, (№36/52), 1932, С.62-63.

¹¹⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 22.7.1891 (3.8.1891) .

結びついているからだ¹²⁾」という結論に達した。フランスとイギリスの態度を理解するため、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の記者は、英仏の新聞に記載された日清戦争に関連する記事を分析していた。新聞記者の分析結果によると、1894年9月、及び10月には、フランス政権が日清戦争に対する自らの立場をまだはっきり決定しておらず、日本に対する好意的態度が表れており、太平洋岸地域における日本の新たな文明普及の使命を賞賛していた。

イギリスの態度はより複雑であった。当初イギリス人は、ことごとく中国人の側に立っていた。ロシアの記者の意見によると、それはおそらく、中国の方が強いとイギリスがみなしていたためであった。しかし日本の形勢が有利であると分かると、イギリスが好意を寄せる相手もすぐに変化した。9月の末ごろからイギリスのジャーナリズムは日本におもねり、「もし『他の』列強が日本からその勝利の成果を奪おうと望むなら、日本を支持しこれら『他の』列強の戦争介入を排除しなければならない¹³⁾」と述べ始めた。

『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙に掲載された記事の分析から、日清戦争の初期には、ロシア政府が日本人の戦力をみくびっていたこと、日清戦争以降に、アジアの戦争が、ヨーロッパ列強の衝突に至る恐れを抱くようになったことが明らかになった。そしてなによりも、ロシアは、当時ロシアの「ナンバー・ワン」の競争相手であったイギリスが日清戦争を自国の利益のために使用することについて懸念を抱いていたことが明らかになった。1894年10月7日に、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙は次のように書いている。「我々はこの黄色い戦争が全く異なった結果を伴うものと考えている。おそらくその通りなのだが、もしも、ヨーロッパ諸国が、朝鮮における血で塗られたドラマに注意している間、自分の病を忘れてしまっているように見えるとしたら、それは黄海、及び日本海岸で起こる事件がどのようになろうとも、自分たちの利益にとって非常に重大なことになると、ヨーロッパ諸国が考えているためだ。[略] 重要なことは、極東における戦争は始まったばかりなのに、ヨーロッパ列強が次々と武装し、これまでは貿易部門での平和的な競争しか行っていなかった場所で、軍事行動に出ようと準備していることだ。したがって、黄色人種の戦争は、現在もすでに白人たちを軍備で散財させているが、今にこの黄色人種の戦いは白人たちの戦いと化すだろう¹⁴⁾。」

1894年10月まで、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙面において、日清戦争の問題に関する読者の投書の掲載数はあまりなかった。少数ではあるが投書を分析すると、日清戦争はその開戦期に、ロシア世論の日本に対する見解に多大な影響を与えたと言えるだろう。

¹²⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 15.9.1894 (27.9.1894) .

¹³⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 15.9.1894 (27.9.1894) .

¹⁴⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 25.9.1894 (7.10.1894) .

その頃、政治筋に関係がないロシア人が初めて日本を近代化された強国であるという印象を受けることになったようだ。9月22日にアルグスと言うペンネームを使った記者が「新たな世界的強国」と言う記事で日本について次のように書いた。「あらゆることからわかるとおり、日本人はヨーロッパ人の陸海軍の戦略だけでなく、その外交戦略も学び取っている。[略] 日本には新聞も国会も、さまざまな情報公開の制度も存在する。ヨーロッパの通信員たちが全く注意を払わなかったのには驚きだ。ヨーロッパの外交官がどこに注意を向けていたのかは、さらに理解しがたい¹⁵⁾。」

2.4 日本に対する競争相手というイメージの形成の第二段階

1894年10月末頃から1895年4月17日の下関条約の締結へと進んでいた時期を、日本に対する競争相手というイメージの形成過程の第二段階と呼ぶことができるだろう。新しい段階への移行は、主に日本の決定的勝利によって中国政府が和平の申出をすることが明らかになった時から始まった。第二段階の特徴は、日清講和締結の場合、日本がどのような要求を出すか、またヨーロッパの列強がその要求に対してどのような態度を取るかという問題であった。しかしその頃、ロシア人は、依然として日本政権がヨーロッパの国々の合意なくしては、またはヨーロッパ諸国の利害に反しては、中国との軍事対立をうまく解決できないという甘い期待をもっていた。

10月末に発行された『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙の社説によると、その頃ヨーロッパ諸国政府の大部分が日清戦争に干渉する時期はまだ訪れていないと言っているが、その時が来ないと結論づけるべきではないとしている。そして、ロシア人は「逆に、中国政府に和平の申出をさせるほどの決定的勝利を日本が収めた場合、ヨーロッパ諸国の政府が、待機状態から抜け出すことは十分あり得る。そうして彼らは、日中間の和平条約が自分たちの利益を侵害するものをなにも含まないように主張する確かな権利を有していることを、戦勝国に思い出させることになるだろう¹⁶⁾」という結論に至った。

1894年秋に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』に記載された社説によると、ロシア政権は、日本がロシアとの関係を悪化させないため、日清講和条約を締結する際、台湾以外には、中国と朝鮮の領土を求めないということを信じていたようだ。この新聞の読者の投書によると、ロシアの世論は政府の意見と同じであったと思われる。例えば、10月14日に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の読者が、「日本の為政者たちは、自ら首尾よく始まった企てを完全に成功裏に終わらせるための最善の方法を理解できるほどに『西欧化』されているだろう。自らを敗者と認める敵に対する度を越した要求は、日本にとって全く安全

¹⁵⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 22.9.1894 (4.10.1894) .

¹⁶⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 13.10.1894 (25.10.1894) .

なことは言えないだろう。これ以上許容できるのは、賠償金の一部に代えて北京政府が日本に台湾を譲渡することだけである。日本はもちろん、中国大陆に領土を獲得しようなどとは考えるべきではないし、また、朝鮮に関して言えば、ロシアがこの小国の日本への併合を許さないばかりでなく、和平締結後日本がその地を一時的に占拠することにも反対するだろうことは、東京の政府もよく知っている¹⁷⁾」と書いている。

しかし、日本は日清戦争を首尾よく終わらせるために、ヨーロッパの列強に仲介を求めるのではないかという意見が記載された。そのため、ヨーロッパ列強の、特にイギリスが日清戦争を自らの利害のために利用するのではないかという懸念が、さらに強くなった。その頃、ペテルブルグの『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙だけでなく、モスクワで発行された『モスクワ報知』¹⁸⁾ 新聞の記事では、日本が北京において和平を押し付けることになるとしても、その和平の条件がロシアやロシアの同盟国であるフランスより、イギリスにとって有利になるようなことは、許すべきではないという見解が優勢であった。

1894 年秋、及び 1895 年にかけて、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙では、日清の和平が極東におけるロシアの態度と利益にどのような影響を与えるかについて、広汎な論議が始まった。寄稿者や読者の意見は、中国に打ち勝った日本に引けを取りたくないと考えていたロシアにとって、中国や朝鮮の太平洋海岸で不凍港を得ることが、なによりも大事なことである、としていた。そして、ロシア世論に従う形で、1894 年秋に「不凍港を獲得する問題」は、ロシア内閣内部の問題だけでなく、国威の問題になっていった。

1895 年 1 月 17 日に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙面では A. ベラモルが、「朝鮮におけるわが国の利害」という記事において、「日本が、強力で、精力的かつ有能な、新しいイギリスだということは、今やほとんど疑い得ない。この日出ずる帝国が島国であるために、いまだ沿海州南部に必要な見合った真の国境を獲得していない我々のロシア人にとって、日本は特に重要なものとなる。4～5 ヶ月間も凍結するウラジオストック港を、あらゆる国家の新たな政治的・経済的闘争の舞台となりつつある太平洋への唯一の出口と考えるわけにはいかない¹⁹⁾」と書いている。ここで初めて日本が、西洋諸国ではロシアにとって第一の競争相手であるイギリスと比べられている。このような比較は、ロシア人が日本を、東亜におけるロシアの競争相手として考えるようになったことの証拠であろう。

1894 年夏及び秋に、ロシア人は、ヨーロッパの列強が日清戦争を自国の利益のために

¹⁷⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 2.10.1894 (14.10.1894) .

¹⁸⁾ Московские ведомости—Москва, 5.10.1894 (17.10.1894) .

¹⁹⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 17.1.1895 (29.1.1895) .

利用し、新たなヨーロッパの紛争の理由になることを何よりも懸念していた。しかし、1894～1895年の冬には、イギリスや他の西洋諸国ではなく、日本帝国が自ら戦力を有しており、東亜におけるロシアの態度に否定的な影響を与えられることを十分に理解するようになった。このことが、ロシアの政府において、反日本的気運が高まる原因になったと言える。その頃から、ペテルブルグの新聞紙面では、日本に対して使う言葉が、前より激しく、かつ批判的になった。

4月12日に A. B. というイニシャルで記載された投書では、ロシア人が日本に対して抱き始めた恐れが次のように表明された。「住民の少ない、貧しく、制度もよく整っていないわが国の太平洋沿岸地方の隣では今や若く、力強く、エネルギーに満ちに人口 5000 万の国家が急速に成長しており、将来いずれこの国との政治的経済的闘争は避けられないという状況になっているのだ。この闘いをできる限り遠ざけ、闘いの準備を海上でも陸上でも今や始める必要がある²⁰⁾。」

2.5 日本に対する競争相手というイメージの形成の第三段階

1895年4月17日に日本は、中国と締結された講和条約に、他の要求と共に中国大陆における遼東半島北部の領土権利の要求を記入した。日本側の要求の公表は、ロシア世論に爆弾のような衝撃を与えた。全てのペテルブルグの新聞は、日本の要求がロシアの利益に打撃を与えており、ロシア政権が日中講和交渉に干渉すべきだと書き始めた。記事の論調がはっきりと反日本的になったのである。1895年4月20日に発行された『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙の「われわれには何が必要か」という記事の著者は、率直に「太平洋岸のわが国の領土は、首都から非常に遠く離れているため、もしもヨーロッパ側の国境に要するのと同じだけの配慮と支出が太平洋側の国境に関しても必要になれば、われわれにとって途方もない重荷になるだろう。だが旅順が日本人の手に残れば、そうなることは疑いない²¹⁾」と記している。次の日に記載された「現在の政治的瞬間」という記事の内容は、より激しい論調であった。「現在、わが国の将来にわたる極東政策のすべてが決められようとしている。もしも旅順の要塞がほんの一つでも日本の手に残ることになれば、太平洋沿岸におけるわが国の体に長い毒針が刺さっていることになり、われわれはその毒針をすぐにも厄介事と出費との多大な増加のうちに感じるようになる。なぜなら、一方ではその地域のわが国の領土が無防備だからであり、他方ではわが国の大国としての威信と沽券とにかかわるからだ。安易な勝利に酔いしれた日本が、わが国の国境周辺の軍事力においてわが国を凌駕し、わが国に最後通牒さえつきつけ得る

²⁰⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 31.3.1895 (12.4.1895) .

²¹⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 8.4.1895 (20.4.1895) .

までになる—そんなことはとても認められない²²⁾！」という言葉が下関条約に対するロシア人の態度をなによりも明らかに表していると思われる。

そして、ロシア世論において 1894 年夏から始まった日本に対する可能な競争相手イメージの形成の過程は、1895 年 4 月に最終（第三）段階に入ったと言えよう。下関条約の締結以後、東亜の地域における日本が、ロシア人の目には、ロシア帝国にとって競争相手になったと考えられるのである。

日本に対する新しいイメージの形成の第三段階は、次のような特徴をもっていたといえるだろう。ロシア世論において日本に対する敵視が強まったのは、日本による遼東半島北部の領土権利の要求以外に、もう一つの事が強い影響を与えた。それは日清講和条約に対するイギリス政府の態度であった。日清戦争の始めからイギリスの新聞にも政治家の発言にも、中国、または朝鮮における日本の政策を非難する言葉が繰り返されていた。1894 年夏と秋の『タイムズ』紙面における日清戦争に関する記事から、イギリスの世論が、中国側に立っているという結論をくだすことが出来る。しかし、4 月 17 日に締結された日清和平の条件が明らかになってから、イギリスの世論も政府の態度も突然に変化してしまった。

よく知られているように、19 世紀にイギリスの外交政策は、対外貿易の利害に基づいて決定されていた。1890 年代には、英国は七つの海を支配する世界国であり、何よりも現状維持を一番望んでいた。そのため、イギリスの政治家は日清講和条約が東亜における英国の利益に害をおよぼさないことを理解して、日清の講和に干渉する計画を放棄することにした。1895 年 4 月に『タイムズ』は、「遼東半島を日本が占領することは、明らかに中国の誇りを傷つけると同時に同国の力を麻痺させるに違いあるまい。しかし、それは敗戦時には避けがたい成行きの一つだ。いずれにせよ、中国領土の末端にあるこの小さな一角が日本に割譲されることを防ぐために、イギリスが干渉する理由はないと思われる。イギリスの利益は、われわれが見る限りにおいては、この割譲条項によっていささかも脅かされるものではなく、条約の他の条項においてはむしろ促進されるだろう。イギリスの利益が損なわれるか危機に瀕しない限り、我々は今回の交渉に干渉する資格を持たないのだ²³⁾」と記している。イギリスの利益を促進する「他の条項」は、中国が例外なくすべての国に自由貿易を開かざるを得ないことであった。イギリスの産業はいかなる競争も恐れなかったから、イギリス政府は自由貿易に関する条項を利用して、他のどの文明国よりも多くの利益が得られると考えていたのであろう。

『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の記事によると、ロシアの政治家は、英国の態度の変化

²²⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 9.4.1895 (21.4.1895) .

²³⁾ Times—London, 8.4.1895.

について、日本の利害がイギリスと一致したことの証拠であるとの結論に至った。4月22日に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の編集長 A.C.スヴォリンは「小さな手紙」という記事で、日本の要求に対する自分の意見を次の言葉で表した。「戦果があれば、日本人よりも高度に発展している国民であつてものぼせ上がるものであり、それ故、この戦勝国が中国につきつけた法外な諸要求にも、驚くべきことはない。イギリスはこれらの要求が気に入っている。イギリスは将来もこれまでどおり中国人たちをアヘン中毒にしておくつもりだからであり、日本に対しては、北部では好きなものをすべてとつてもよいが、南部ではイギリスにとって不都合だからなにもとるなということを書いておいてあるからだ²⁴⁾。」

イギリスは以前にもロシア外交政策の計画に干渉することがあったので、今回も英国が、ロシアの態度を弱めるために日清戦争を利用したいと考えたことは不思議ではない。そして、ロシア人の意識の中で、日英の接近が、日本に対する見解に強い悪影響を与えたことも不思議はない。

3. まとめ

以上の分析を通して、日清戦争期にロシア世論における「競争相手」という日本のイメージ形成には、ロシアの新聞に掲載された、政府による日本の評価が大きな役割を果たしていたことが明らかになった。また、ロシア政府が、東アジアにおける日本の政策に対して行った評価には、日本の政権のみならず、西洋諸国、特にイギリスの態度が大きな影響を与えていたことを示した。

また、1895年4月に『ノーヴォエ・ヴレーミャ』紙に記載された記事や投書から、当時、ロシア帝国の第一の競争相手であるイギリスが、東アジアにおける日本の強化を手段として利用し、その地域におけるロシアの影響を弱めようとしているのだとロシア政府が考えていた可能性があることを示唆した。

帝国主義時代に自国の利益を拡張しようとする者が干渉を受けるのは当然あつて、何も日本だけに特別のことではなかった。ロシアも、ナポレオン戦争以後は、英国とともに世界の二大覇権国と並び称せられながら、トルコを制覇しようとして、何度英国の干渉を受けて涙をのんだかわからない。そして、ロシアの政治家が行った1895年の三国干渉の参加は、日本だけでなく、ロシアの以前からの競争相手であるイギリスに対する報復措置でもあったといえるだろう。つまり、日清・日露戦争期の日露関係の特徴について考える際に、日露のみならず他国からの影響も考慮に入れる必要があると考えられる

²⁴⁾ Новое время—Санкт-Петербург, 10.4.1895 (22.10.1895) .

のである。

日清戦争期にロシアで形成された日本に対する「競争相手」というイメージが、19世紀と20世紀だけでなく、現在もある程度ロシア世論の日本観に影響を与えていると推察される。すなわち、日本に対するこのイメージが形成された過程とその特徴を理解することは、現在の日露関係を新たに見直すことに貢献すると思われるのである。

参考文献

岡崎久彦『陸奥宗光とその時代』PHP 研究所, 1999.

田中彰・高田誠二編著『「欧米回覧実記」の学際的研究』北海道大学図書刊行会, 1993.

久米邦武編『米欧回覧実記』岩波書店, 1985.

The History of Anglo-Japanese Relations. VI The Political-Diplomatic Dimension, 1600-1930.
Macmillan Press LTD, 2000.

Lensen G. *Korea and Manchuria between Russia and Japan 1895-1904. The Observation of Sir Ernest Satow British Minister Plenipotentiary to Japan (1895-1900) and China (1900-1906).* The Diplomatic Press. 1966.

Nish I. *The Origins of the Russo-Japanese War.* New York, 1985.

Витте С.Ю. Воспоминания. Москва, 1960.

Кутаков Л.Н. Россия и Япония. Москва. 1988.